

とんち小僧のはなし ②

むかし、えらい坊さんと小僧がさる寺にいたんだとお。ところがだん家では坊さんに、かめにたくわえた蜂蜜を布施してきたんだとお。坊さんはそれを寒いときになめようと思い小僧に「小僧このかめには毒が入っているでなあ。勝手になめたりしてはいかんぞ。なめると死ぬぞ。」そういまして戸棚に隠してしまつたんだとお。小僧はそういわれるとなめてみたくてたまらない。こつそり坊さんの出かけたあと、かめのなかのものをなめてみると砂糖より甘い。盗み食いも一回だけでやめようと思つたがやめられない。かめを空にしてしまうほどになつたんだとお。思案のあげく坊さんの大切にしてあつた机のすずりをこわして泣いていたんだとお。坊さんは帰ってきて「小僧、なんで泣く。」と問いつめると「おしよさま、掃除をするとき、おしよさまの大切なすずりをこわしてしまいました。おわびに死のうとかめの毒を飲みましたがいっこう死なれず泣いています。」これにはおしよさまは怒るにも怒られず「困つた。困つた。」というばかり、この小僧のとんちのよさにあきれたんだとお。

とんち小僧のはなし ③

むかしむかし、だん家がお寺におはぎもちの重箱をもつてきたんだとお。丁度お坊さんはほかのだん家へ行って小僧がひとりできて、重箱をのぞくとうまそうなおはぎもちがいっぱい入っていた。腹はへっているし、みんな食べてしまつたんだとお。そしてあんを須弥檀の仏さまの口元にぬって、知らん顔していたんだとお。やがて坊さんが帰つてくると、重箱が空っぽになっているのに気づき「小僧、この重箱のなかはどうしたわけかと聞きたすと、「おしよさま仏さまがみんな食べてしまいました。その証拠に仏さまの口元